

組織学会通信

No.94

2023. 12. 20

【 組織学会 会長退任のご挨拶 】

東京理科大学 高橋伸夫

あつという間の2年間でした……と言いたいところですが、正直、2年間は長かった。

その間、東京大学を定年退職し、東京理科大学に移りと、私事で忙しかったことは事実です。しかし、学会関係で発生する様々なトラブルの処理(会員のみなさんが気づかなかつたとすれば、それは処理としては大成功したということです)や積年の懸案事項の決着を迫られたことも多々ありました。たまたま組織学会が一つの曲がり角に差し掛かっていた時期に当たってしまったのだと思い込みたいところですが、私の不徳の致すところだったのかもしれない。歴代の会長が皆こんな感じだったとは思えませんし、今後、会長に就任される方も心配される必要は全くありませんが、個人的には何とか曲がり角は回り切れたのかなと思っております。

その間、私が直接就任をお願いした担当理事の先生方だけではなく、評議員や各種委員会の委員の先生方にも本当にお世話になりました。とりわけ総務担当理事だった網倉先生には、この場をお借りして、心より御礼申し上げます。網倉先生なしには、とても乗り切れませんでした。

ところで、組織学会では、過去には、高宮先生を別格とすれば、定年後に会長をやっていた先生方はいなかったはずなので、私が会長就任の最高齢記録になるのではないかと思います。ちなみに、私が初めて理事になったのは1993年みたいなので(当時、最年少記録とか言われていた)、それ以来30年間も組織学会の執行部周りをうろちょろしていたわけです。でも実は、私は学会活動それ自体が苦手でした。

若い頃は、就職その他諸々の事情で、本意ながら、自己顕示欲の塊となって活動していた時期もありましたが、それも長続きせず。そんな中で、組織学会での活動が長く続けられたのは、ひとえに大会や委員会先生方とお話しするのが楽しかったからでした。目の前の研究だけではなく、広く学問全般について、刺激的で面白いお話ができるということが魅力でした。組織論が面白い、いや組織自体が面白いということを感じさせてくれる会員の層の厚さこそが、組織学会の最大の財産なのだと思います。

私的に、とても印象に残っているシーンがあります。それは2004年に東京大学で研究発表大会を開催した時の懇親会でのことです。会場は、よく懇親会等に使っていた経済学研究科棟1階のロビーでしたが、予想外に当日参加が急増したために、料理も飲み物もあっという間になくなり、会場はぎゅうぎゅう詰めの満員電車状態になってしまいました。内心「早く帰ればいいのに」(すみません)と思って会場を眺めていると、移動も身動きもならない先生方が、たまたまその場に居合わせた見ず知らずの先生方と楽しそうに会話しているではないですか。結局、お開きまで、どなたも帰りませんでした。

立派な論文を書いて一流ジャーナルに載せるということは、もちろん大切なことです。が、もっと面白い研究をしませんか。そして、もっと面白い話をしませんか。大会の会場で、懇親会で、またお会いできることを楽しみにしております。

【組織学会 会長就任のご挨拶】

一橋大学 青島矢一

この度、組織学会の会長を拝命いたしました一橋大学の青島矢一です。大変名誉なことではあるのですが、真面目に学会活動をしてこなかった私には到底務まらないような重責であり、選出された瞬間は頭が真っ白になりました。とはいえ、消え去るわけにもいかず、急ぎ、優秀な評議員の方々に理事をお願いいたしました。幸運なことに、私に同情してくださったのか、みなさんご依頼をお引き受けくださいました。結果、「最弱の会長」に「最強の理事」という新たな体制を築くことができました。

総務委員会は一橋大学の加藤俊彦先生、『組織科学』編集委員会は東北大学の福嶋路先生、大会委員会は早稲田大学の井上達彦先生、企画・定例委員会は東京都立大学の高尾義明先生、広報委員会は中央大学の生稲史彦先生、国際委員会は京都大学の山田仁一郎先生が、それぞれ理事を担当してくださいませ。まさに「最強の理事」の方々です。研究・教育はもちろんのこと、学務や政府系の委員などでも大変な重責を担われている方々なのですが、そうした中でも就任をご承諾いただき、本当に感謝いたしております。

せっかく最強の理事の方々にご就任いただきましたので、私もできる限り、学会の発展に貢献できればと思っています。今のところ、以下の2つのことに挑戦してみたいと思っています。1つは「外から内」への国際化、もう1つは、国内雑誌としての組織科学誌の存立基盤の強化です。どちらも私の過去の理事としての経験上感じた問題意識に根ざしております。

私は昨年まで国際委員会担当理事を担当しておりました。研究者に対する国際化の要求が年々高まっていることに対応して、組織学会員の国際化を支援することが国際委員会の重要な役割であったと認識しております。たとえば、前任の先生方のご尽力によって、AOMでのAAOM主催のPDWにおいてパネルの企画等、学会員の国際学会におけるプレゼンス向上を支援する取り組みが行われてきました（私の任期中には力不足で実現することができませんでした）。そうした取り組みの成果もあって、最近では、若手研究者を中心に積極的に国際学会や海外ジャーナルで論文を発表するようになりました。こうした実績からも、国内の学会員が海外に進出する「内から外」での国際化は既に定着しつつあると思います。

そこで、次の段階として、海外の研究者に日本に集まってもらうことによる「外から内」への国際化を進められないかと考えています。幸いなことに、観光に限らず「日本」を魅力的と考える海外の研究者は増えているように思います。円安の追い風も吹いています。この機を捉えて、定期的に海外の研究者が日本に集まり日本の研究者と交わるような学会の場ができないかと思っています。もちろんその実現のためには、英語論文のレフェリー体制の構築など、多くのハードルが存在していることは承知していますので、理事の方々に相談しながら、できることから一步一步進めていきたいと思っています。

もう1つは組織科学誌の存立基盤の確立です。以前、組織科学編集委員長を担当していた時に苦慮していたことです。国際的な査読ジャーナルでの論文掲載が研究者の評価にとってますます重要になるという流れの中で、日本の学会の日本語の雑誌がどのように存在意義をもつのかというのは難しい問題です。

組織現象の多くが固有の社会制度や文化の影響を受けるという事実を考えれば、国内に基盤を持つ研究者が国内の現象を深く研究することの意義は今でも大きいと思っています。しかし一方で、日本語で書かれた論文の読者は極めて限られますので、国際ジャーナルでの論文掲載に向けて努力を集中した方が、研究者としてのキャリアを積む上で得策だと考えても不思議ではありません。近年、自由論題の投稿者数が伸び悩んできたことも理解できます。

このような状況に、これまでの編集長／編集委員会の方々には、若手CFPや大会CFPなどさまざまな斬新なアイデアを実行して対応してくれました。組織科学の査読プロセスには、SEの先生方が親身になって支援してくれるという、他の学術雑誌にはない独自の魅力があると思っています。そのことは、特にキャリア初期段階にいる研究者にとって有益です。この点を強みとして認識した取り組みを、今後も進めていければと思います。

また、国際的な発信という点では、これまで行ってきた、英語論文の掲載や一部論文の英文翻訳を通じた発信を、近年の翻訳／校正技術の進歩を取り入れて、追加コストをかけずに拡大するような方法を模索できればと思っています。

歴代会長の先生方が、組織学会の安定した会員数と盤石の財政基盤を築き上げてくださいました。余剰資金を抱えた日本企業がイノベーションを求められているように、組織学会にも新たな挑戦に取り組むだけのゆとりはあるように思います。そしてなにより重要なことは、それを実行できるだけの能力とマインドセットをもった理事の方々がおります。変化を生むには絶好の機会かと思えます。頼りない私も自分のお尻を叩いてお仕事をいたしますので、是非、会員の皆様からのご支援、ご協力をいただけますよう、何とぞよろしくお願い申し上げます。

【大会関係】

【1】2024年度組織学会年次大会報告

2023年10月28日（土）および29日（日）関西大学にて、原拓志先生を実行委員長として、2024年度組織学会年次大会が関西大学主催により開催されました。2022年の武蔵大学大会に続き今回も対面による開催となったわけですが、330名（招待者含む）もの参加者を迎え、盛況のうちに終了することができました。原先生、横山先生はじめ、関西大学大学の実行委員会の先生方には、コンテンツの考案から当日の会場での対応に至るまで、丁寧にご準備をいただきました。心より御礼申し上げます。また、大会でご登壇された先生方、ご来場くださった学会員の皆様にも重ねて御礼を申し上げます。関係者の皆様のご協力のおかげで、今回も大きなトラブルもなく、無事に大会を終了することができました。

本大会の統一テーマは、「組織論的視点の浸透」でございました。当日は、このテーマのもと、2日間にわたり、（1）モーニング・ミーティング、（2）開催校主催セッション、（3）大会委員会セッション、（4）組織科学編集委員会セッション、（5）ランチョン・ミーティング、（6）基調講演、（7）特別セッションなど、バラエティー豊かなセッションが提供されました。

今大会から始まった試みの1つが、（1）のモーニング・ミーティングになります。中園宏幸先生、木川大輔先生、舟津昌平先生による企画、青島矢一会長、高尾義明先生、山田仁一郎先生、服部泰宏先生といった登壇者をお招きして、「今さら聞けない経営学についてのあれこれ」に踏み込むトークセッションを行いました。新しい分析手法の学習や英語論文の書き方といったテクニカルな側面はもちろん、共同研究の立ち上げ方やメディアとの関わり方のような研究全般に関わる側面に至るまで、これまでは、それぞれの研究室の中のクローズドな、あるいは研究仲間同士の居酒屋トークの中で語られてきたネタについて、学会員の皆様と共にオープンに議論をする場となりました。

(2)については、歴史、アントレプレナーシップ、戦略と組織、組織と安全、産業の電動化と変革、職場の変化など、さまざまなテーマが設定され、経営学者はもちろん、さまざまなディシプリンの研究者をお迎えすることができました。同様に(3)の大会委員会セッションにおいても、インクルージョン&ウェルビーイングや起業家教育といった経営学の王道かつ重要トピックに加えて、NPO 組織、社会科学の根本概念と組織といったエッジの効いたトピックに関わるセッションも提供され、実に刺激的な議論がそこかしこで交わされていました。その後は例年通り、(4) 組織科学の編集委員会セッションも開催されました。1日目および2日目の昼休みには、すっかり定番となった(5) ランチョン・ミーティングが開催されました。1日目は大会委員長の原先生によるプレゼンテーション、そして佐藤郁哉先生による「ワクワクする研究を目指して」と題するセッションが行われました。経営学者の間でいま話題となっている名著『経営学の危機』の議論に関わるものであり、お昼の時間帯であるにもかかわらず、多くの学会員が参加され、日本の経営学がただただレリバントであるだけでなく、同時に面白いものであるために何を考える必要があるのか、熱心に議論を交わしていたことが印象的でした。『経営学の危機』に関わるセッションは、2日目にも、「AI が切り拓く経営学研究の可能性」と題して、李振先生および矢田勝俊先生の話題提供のもとに行われました。

(6)の基調講演では、株式会社ハピネスプラネット代表の矢野和夫様をお迎えして、ウェルビーイングと組織マネジメントについてのご講演をいただきました。データ分析の手法を用いつつ、ウェルビーイングの測定と現場への介入によるその向上にどのように取り組んでこられたのかというお話は、関与するべき現場を持つ経営学者にとって、実に示唆に富む内容であったと思います。初日の最後は、(7)「ウェルビーイング経営の挑戦」と題する特別セッションでした。森永雄太先生司会のもと、ANA 商事株式会社の國分裕之様、富士通株式会社の荒木勤様、ロート製薬株式会社の河崎保徳様をお招きして、企業経営の中にウェルビーイングをどのように取り込むべきかという問題について、戦略や組織、組織改革といった組織研究の幅広いイシューをフォローする形で議論を行いました。

2日目には、上記の(2) 開催校主催セッション、(3) 大会委員会セッション、(4) 組織科学編集委員会セッション、(5) ランチョン・ミーティングに加えて、もう1つの(7) 特別セッションが開催されました。矢田先生に加えて、鷲尾隆先生、津本周作先生、里村卓也先生をお招きしてのセッションであり、「見えないものが見えてくるとき、拓けてくる研究フロンティア」と題するものでした。セッションにおいては、データ・サイエンスのフロンティアと、それが経営学研究にもたらしうるインパクト、経営学研究にとってありうる発展の道について、実に未来志向、かつ刺激的な議論が交わされました。これが大会の最後を飾るセッションとなりました。

充実したセッションの実現にご協力くださった全ての皆様に心より御礼申し上げます。そして繰り返しになりますが、原先生、横山先生はじめ、関西大学大学の実行委員会の先生方に改めて感謝申し上げます。関西大学の先生方および事務局のお二人のご尽力によって、2024年度組織学会年次大会は盛況のうちに幕を閉じることができました。改めて、御礼を申し上げます。

ドクトラル・コンソーシアムの開催報告

大会に先立つ10月27日（金）には、ドクトラル・コンソーシアム（ドクコン）が開催されました。オーガナイザーの生稲史彦先生、宮尾学先生、山野井順一先生の御尽力に深く御礼申し上げます。周知の通り、ドクトラル・コンソーシアムは、年次大会に先立つ研究発表大会の大学院生セッションにおいて優れた発表を行った大学院生の会員が、大会委員会の厳正な審査によって参加資格を得るものになりますが、今回の大会より、ドクコン参加者について「組織学会2023年度研究発表大会（大学院生セッション）優秀報告者」という呼称を用いることにいたしました。優秀報告者におかれましては、研究の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。同日には、ドクトラル・コンソーシアム参加者による懇親会も開催され、相互の親睦を深めることもできました。

***2024年度組織学会研究発表大会（明治大学）のお知らせ**

2024年度組織学会研究発表大会は、6月22日（土）・23日（日）に、明治大学にて開催されます。次回の大会も、現時点では対面での開催を予定しておりますので、今から皆様のご予定を確保していただければと思います。しばらくしますと大会報告の申し込みが開始いたしますが、大会報告申込を予定されている方は、執筆要綱を熟読の上、規定のフォーマットに則り原稿を作成し、チェックリストにて確認のうえ、ご応募くださいますよう、重ねてお願い申し上げます。

大会委員会担当理事 井上 達彦

2024年度組織学会年次大会 開催校挨拶

2024年度組織学会年次大会は、2023年10月28日（土）と29日（日）に関西大学を開催校として、対面にて開催いたしました。この時期は、入試など各種の校務が重なるシーズンでもあるため、参加が難しい会員も多いのではないかと不安を抱えておりました。結果的には、333名という大変多くの方にご参加いただくことができました。

大会担当理事の井上達彦先生をはじめとする大会委員会の先生方、各種セッションにご登壇いただいた先生方、学会事務局に、心より御礼申し上げます。

今大会は、組織論が捕捉する領域が大きく広がりを見せていることから「組織論的視点の浸透」というテーマを設定して開催いたしました。特に力を入れたトピックスが今注目を集めている社会動向であるウェルビーイングとデータ・サイエンスです。基調講演、ランチョン・ミーティング、特別セッションは、この2つのトピックスで構成しました。

1日目は、近年さまざまな学問領域で取り上げられている「ウェルビーイング（幸福）」と組織論について、ランチョン・ミーティングでは、佐藤郁哉先生に『経営学の危機』を超えて：ワクワクする研究を目指して」という題名で話題提供していただき、まさに社会と研究者のウェルビーイングを考える機会ともなり、佐藤先生の絶妙なトークで満席の会場は大いに盛り上がりました。関西大学 BIG ホール 100 会場において開催された基調講演では、「ウェルビーイングと組織マネジメント」というテーマで、ウェルビーイング研究のパイオニアであられる矢野和男氏（株式会社ハピネスプラネット代表取締役 CEO、株式会社日立製作所フェロー、東京工業大学連携教授）より、データ・サイエンスを駆使して分析されてきた「幸せで生産的な企業」についての知見を共有していただき、利他的行動の基盤となる三角形の関係づくりなどをめぐって、熱い議論が繰り広げられました。つづく特別セッション I では、森永雄太先生の司会進行のもと、國分裕之氏（全日空商事株式会社 代表取締役社長）、荒木勤氏（富士通株式会社 Employee Success 本部 Employee Relation 統括部長）、河崎保徳氏（ロート製薬株式会社 取締役 CHRO）にご登壇いただき、ウェルビーイングの向上について各社の取り組みを詳細にご紹介いただき、興味深いパネル・ディスカッションも展開していただきました。

2日目は、昨今進展が著しく、本学においても力を入れようとしている「データ・サイエンス」と組織（論）との関係が取り上げられました。ランチョン・ミーティングでは、『経営学の危機』を超えて：AI が切り拓く経営学研究の可能性」と題して、李振先生（関西大学）と矢田勝俊先生によって先行研究レビューでの AI の活用例などの話題が提供され、参加者から実践的な質疑が相次ぎました。午後の特別セッション II では、「見えないものが見えてくるとき、拓けてくる研究フロンティア」というテーマについて、矢田勝俊先生の司会進行のもと、鷲尾隆先生（大阪大学）、津本周作先生（島根大学）、里村卓也先生（慶應義塾大学）にご登壇いただき、多様な領域におけるデータ・サイエンス活用の最前線と可能性について議論をしていただきました。

「組織論的視点の浸透」というテーマのもと、その他の開催校企画として、戦略、歴史、イノベーション、ヒューマン・リソース・マネジメント、アントレプレナーシップ、安全マネジメントという問題群に組織論を掛け合わせた企画セッションを設けました。これらの問題群に組織論がいかに貢献できるか、その取り組みがいかに組織論を豊かにするかを考える契機とすることが狙いでした。これらに、ダイバーシティや機械学習、起業家教育、NPO、根本概念という多彩な大会委員会の企画セッションや編集委員会の企画セッション

を加え、4会場に分かれて、合計12のテーマについて各80分間のセッションが両日午前
に実施されました。いずれも現代の社会問題を反映した組織論のテーマであり、登壇者
を中心に熱心な意見交換が行われました。

さらに今回のフレッシュな取り組みとして、経営学の質問箱と題して、大学院生やアー
リーキャリア研究者の質問に対してベテラン研究者が回答するモーニング・ミーティング
が、中園宏幸先生、木川大輔先生、舟津昌平先生の企画・司会のもとで開かれ、朝早い時
間にも関わらず多くの聴衆が詰めかけて青島矢一先生、高尾義明先生、服部泰宏先生、山
田仁一郎先生からの回答に熱心に耳を傾けていました。なお、10月27日（金）には大会
に先立ち関西大学にてドクトラル・コンソーシアムも開催されました。

今回、年次大会としては4年ぶりに懇親会も開催することができました。関西大学100
周年記念会館にて、前田裕関西大学長のご挨拶、青島矢一組織学会長のご挨拶、廣田俊郎
先生の乾杯ご挨拶を皮切りに多くの学会員の方々が一堂に会して、多様で活発な交流がな
されました。その大いなる盛り上がりのもとで、改めて学会の対面開催や懇親会の意義を
肌で感じました。

2024年度組織学会年次大会が盛会に終わりましたことをここに報告し、開催にご協力
いただきました全ての皆様、登壇者の皆様、参加者の皆様に重ねて、御礼申し上げます。
ありがとうございました。

2024年度組織学会年次大会 実行委員長 原 拓志

2024年度ドクトラル・コンソーシアム報告

ドクトラル・コンソーシアムは、次世代の組織論研究を担う若手研究者育成を目指して
2001年度から行われてきたものです。今年度は年次大会に先立ち、10月27日(金)に開催
されました。2022年度まではコロナ禍の影響もありオンライン方式（Zoom）での開催で
ましたが、昨年度からは対面方式に戻り、今年度は主催校の関西大学が提供して下さった会
場で開催することができました。参加メンバーと内容は以下の通りです（敬称略）。

	氏名	所属
オーガナイザー	生稲 史彦 宮尾 学 山野井 順一	中央大学大学院 戦略経営研究科 教授 神戸大学大学院 経営学研究科 教授 早稲田大学 商学学術院 商学部 准教授
参加者	石崎 啓太 近藤 祐大 花原 杏珠 山本 将也 孫 彦鵬 林部 由香	一橋大学大学院 経営管理研究科 博士後期課程 早稲田大学大学院 商学研究科 修士課程 東京大学大学院 経済学研究科 修士課程 筑波大学大学院 人文社会ビジネス科学学術院 博士課程 一橋大学大学院 経営管理研究科 博士後期課程 神戸大学大学院 経営学研究科 博士課程

例年通り、午前・昼・午後の3つのセッションに分けて実施しました。参加者・オーガナイザーともに、朝から夕方まですべてのセッションに参加しました。

午前中は、企業合併と製品イノベーションの関係（石崎さん）と、スタートアップの成長において助成金が果たす役割（近藤さん）について、ペーパー・ディベロップメント・セッションを行いました。午後は、心理的安全性とチームの形成の関係（花原さん）、UXデザインとサービス・パフォーマンスの関係（山本さん）、中国におけるシェアリング・エコノミーの事例研究（孫さん）、有期雇用契約の労働者が長期で働く状況で生じる現象と変化（林部さん）を取り上げて、ペーパー・ディベロップメント・セッションを行いました。また、昼のセッションでは、生稲、宮尾、山野井のオーガナイザー3名が、若手の研究者に取り組んで欲しいことをテーマに設定して15分程度のレクチャーを行い、若手と意見交換しました。

当日は、午前10時30分に開始し、全員で簡単な自己紹介を行った後、ペーパー・ディベロップメント・セッションを、10時50分から12時40分までと、14時から18時過ぎまでの2回に分けて実施しました。大学院生6名の論文について、ひとり50分の時間をもって報告をし、討議を行いました。各セッションでは、大学院生が自らの論文の内容を15分程度で報告した後に、事前に割り当てられた他の大学院生1名が5分程度でコメントし、論文の良い点と改善の可能性を報告し、全員で共有しました。続いて、事前に割り当てられた担当オーガナイザーが8分程度でコメントをし、残りの時間で全員参加のディスカッションを行いました。

以上のペーパー・ディベロップメント・セッションの主たる目的は、「現在の原稿を学術誌（『組織科学』）に掲載されるレベルにまで高めるにはどうしたらよいか」に置かれました。大学院生は、自らの論文に対するオーガナイザーや他の大学院生からの質問やコメントを聞いて学ぶだけでなく、他の大学院生の論文に対するコメンテーターの役も経験しました。他の論文にコメントをすることで査読者としての視点を体験し、より幅広い視野から自分の論文や研究を捉える経験を積むためです。大学院生は皆さん優秀で、またテーマやトピック、方法論も異なっていましたので、さまざまな角度から研究の内容を議論することができ、有意義な時間が過ごせたと思います。また、今回の参加大学院生は学部から進学した日本人大大学院生だけではなく、社会人大大学院生や海外出身大学院生など様々なバックグラウンドの参加者がいました。そのことで、多様な視点に立って経営学の実証研究を考える機会になりました。

午前終了後の昼のランチョン・ミーティングでは、宮尾、山野井、生稲の3名のオーガナイザーが、これまでの研究活動を振り返り、どのように研究を進めて欲しいのか、あるいはどのような点に注意して投稿論文を執筆していけばいいのか、若手の時にどのような

ことを心掛けて欲しいのかといったことを話しました。大学院生の皆さんが今まさに悩んでいるようなことは、オーガナイザー自身もかつて苦労しました。だからこそ、それらの問題にどのように考えて対処したのかに関し、具体的な体験に基づいて語るようにしました。結果、大学院生のみならず、オーガナイザーにとっても、深い学びを得ることができたと思います。また、オーガナイザーがかつて学会で受けた指導を次の世代に送るという思いを強くしました。

コンソーシアムに引き続き、今年度は懇親会を淡路駅近くのジャストミートで開催することができました。同日開催の理事会評議員会合同会議と重なってしまったこともあり、オーガナイザー以外のゲストをお呼びすることはできませんでしたが、コンソーシアムでの雰囲気そのままに論文や研究の内容、研究生活などを話すことができました。

今回のドクトラル・コンソーシアムは昨年が続いて対面開催となり、昨年と同様、非常に有意義な機会になったと思います。さまざまな調整をして下さった組織学会大会委員先生方ならびに執行部の諸先生方と、開催校の諸先生方、前年度総合オーガナイザーであった稲水伸行先生とその他関係者の皆様方に、心より御礼を申し上げます。

ドクトラル・コンソーシアムに招待されることは大学院生にとって名誉なことであり、またこの会で得られた同世代の若手研究者とのネットワークは貴重な財産となります。われわれ経営学研究者の多くは、所属大学が違っても、組織学会を含む学界に育てられたという思いを持つ人が多くいます。若手研究者のみなさんもこの会を通じて築かれた友情が、今後の研究生活において続くことを願っています。そして、ドクトラル・コンソーシアムでの議論を活かし、一人でも多くの大学院生の皆さんの論文が『組織科学』に掲載できることを心から願っております。

2024年度担当オーガナイザー 生稲史彦、宮尾学、山野井順一

【2】2024年度組織学会研究発表大会のお知らせと公募要領

2024年度組織学会研究発表大会は、2024年6月22日（土）・23日（日）の両日、明治大学を開催校として開催いたします。現在のところ、駿河台キャンパスを予定していますが、会場確保の都合上和泉キャンパスとなる可能性もあります。明治大学では、2007年度年次大会以来の開催となります。

本年6月の京都産業大学における研究発表大会は、2019年3年ぶりの対面による開催となり、400名を超える参加者が集い、活発な研究報告と交流が行われました。オンラインの良さもありますが、学会での対面開催の重要性を改めて感じた方も多いかと思いません。2024年度の研究発表大会もその意義を継承し、対面による研究発表・交流の場づくりに努めたいと考えております。

研究発表大会は、院生セッション、研究発表セッションを中心としたプログラムとなります。下記のとおり報告公募のご案内をいたしますので、会員のみならず、ぜひ研究発表のご検討、ご準備をお願いいたします。

参加者のみなさまにご満足いただけるような研究発表大会となりますよう、実行委員会一同、鋭意努力いたしますので、ご理解とご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

1. スケジュール

2024年1月26日（金）～3月29日（金）	演題登録・報告完成原稿受付期間
2024年1月26日（金）～6月6日（木）	事前参加申込受付期間（名札作成対応）
2024年4月中旬	大会報告審査結果通知
2024年5月上旬	大会プログラムの公開

2. 演題登録と報告完成原稿の提出

組織学会 Web サイトからリンクをたどっていただき、2024年度組織学会研究発表大会専用ウェブサイト(Confit)にログイン(要会員番号。組織学会から郵送される封筒の宛名ラベル右下に会員番号の記載がありますので、ご参照ください)し、演題、キーワードを登録してください。キーワードは、セッション編成時の基準となりますため、以下の中からご自身の研究にあてはまるものを選んでください。

【方法論】 定量分析、定性分析、歴史研究、理論研究、文献レビュー（1つ選択）

【分野】 ミクロ組織、マクロ組織、人的資源管理、経営戦略、国際経営、マーケティング、技術・生産管理、イノベーション、企業家、経済学、法学、行政学、社会学、心理学、工学（2つまで選択）

事前参加登録および演題登録をした上で、Confitの原稿提出画面より報告完成原稿を提出してください。締切日(3月31日)以降、登録情報(タイトル名、報告者名、複数で発表する場合は名前の順番、等)の変更は一切認められません。変更の場合、報告をご辞退いただくこととなります。

※なお、報告応募をされる場合には、事前参加申込を行わないと先に進めませんので、ご注意ください。

報告完成原稿は、『AAOS Transactions』掲載希望の有無に関わらず、執筆要綱に基づき、指定のテンプレートを用いて作成された原稿を受け付けます。提出前にはチェックリストを参照し、要件をすべて満たしているかをご確認ください。これまでの大会でも、テンプレート不使用、ページ数超過、行数字数やフォントサイズの変更、キーワード不在などがみられました。執筆要綱に則っていない原稿は、リジェクトされることがあります。

なお、『AAOS Transactions』に登載された論文は、公表論文として取り扱われます。他の学会報告や論文集の掲載等の二重投稿には十分ご注意ください。『AAOS Transactions』への掲載を希望する場合は大会報告後に改めて確認をいたしますので、ご回答ください。

3. セッションの種類とそれぞれの申込資格

演題登録時に、次のどちらかを選択していただくことになります。

(1) **研究発表セッション**：組織学会正会員(会費滞納者は不可)による自由論題の研究報告で、セッションは発表 25 分と質疑応答 15 分となります。※対面開催のため

(2) **大学院生セッション**：組織学会正会員(会費滞納者は不可)の大学院生(報告時に正規の大学院生として在籍していること)による自由論題の単独での研究報告です。セッションは報告 15 分、質疑応答 10 分、総計 25 分です。報告者の中から、大会委員会で選ばれた方を秋の年次大会時に開催するドクトラル・コンソーシアムにご招待申し上げます。

4. 採否の決定

複数の査読者が完成原稿を査読し、採否を決定し、2024 年 4 月中旬までに、筆頭報告者(ファースト・オーサー)に審査結果を電子メールにて通知します。

特に、参考文献リスト(References)の完全性は掲載の必須要件となっておりますので、投稿者の責任において細心の注意を払ってご作成ください。

2024 年度組織学会研究発表大会 実行委員会

【3】ドクトラル・コンソーシアムについて

研究発表大会の大学院生セッションで報告した方の中から、大会委員会が選んだ大学院生を、その年の秋の年次大会時に開催する「ドクトラル・コンソーシアム」(ドクコン)にご招待いたします。大会委員会の選考基準は「組織科学に投稿して採択されるような論文になることが期待される報告」です。大会委員会で選ばれた方には、研究発表大会終了直後に「インビテーション・レター」をお送りいたします。ドクトラル・コンソーシアムはその年の年次大会前日にほぼ丸一日かけて開催されますので、ドクトラル・コンソーシアムご参加の意思確認をいたします。ドクトラル・コンソーシアム参加者の当該年次大会の参加費は免除します。

ドクトラル・コンソーシアムは、いわゆる Paper Development Session です。ドクトラル・コンソーシアム参加者は、全員が『組織科学』仕様の(投稿規定に則った)論文を持ち寄り、オーガナイザーの指導の下、互いに切磋琢磨することを求められます。ドクトラル・コンソーシアム提出論文は、「組織学会ドクトラル・コンソーシアム査読付報告論文」と明

記できるようになりますが、それに満足することなく、ドクトラル・コンソーシアム終了後できるだけ速やかに修正し、『組織科学』等に投稿されることを強く希望いたします。またドクコン参加者については、「組織学会〇〇年度研究発表大会（大学院生セッション）優秀報告者」という呼称を用いることになっております。

そして、ドクトラル・コンソーシアム開催日あるいは大会開催期間中のいずれかの夜は、ドクトラル・コンソーシアム参加者による懇親会も開かれます。くつろいだ雰囲気の中で、先輩研究者とのカジュアルな対話を通して、良い研究とはどのようなものか、研究を行う上での手がかりや悩み、研究者としてのあり方などを考える贅沢な時間をお楽しみください。

ドクトラル・コンソーシアムに関心を持たれた大学院生の会員は、まずは研究発表大会での大学院生セッションでの報告に奮ってご応募ください。それがドクトラル・コンソーシアム「インビテーション・レター」への最初の一步となります。

大会委員会

【4】2025年度組織学会年次大会のご案内と開催校挨拶

2025年度組織学会年次大会は、2024年10月に、法政大学市ヶ谷キャンパスにて、対面方式で開催する予定です。ただし、学内の事情で現時点では教室利用の予約が確定していないため、場合によっては9月後半や、11月以降の開催となる可能性も残っています。皆様にご不便をおかけして申し訳ございませんが、日程が確定しましたら、メーリングリストや組織学会 web ページなどで、改めてお知らせいたします。

本年次大会の統一テーマは、「経営のフロンティア: 2040年に向けた組織の課題と挑戦」です。2040年は、「2040年問題」という言葉に象徴されるように、少子高齢化や人口減少をはじめとする日本経済・日本企業が現在直面するさまざまな課題や困難が、より一層深刻化するであろうと想定される時期です。

ご承知の通り、日本経済および社会は多岐にわたるさまざまな課題に直面し、長期的な停滞傾向から抜け出せない状態にあります。しかしその一方で、そうした課題に果敢に挑戦し、新しい方向性を切り拓いている組織経営の事例や、組織論・戦略論の新しい議論も出ています。今大会では、2040年という、「近すぎず遠すぎない未来」を時間軸に設定し、いま現在、山積するさまざまな課題に対して組織が何を行っているのか、そして組織論・戦略論研究がどのような概念や理論、分析結果を提示しているのかを、広く議論していきたいと考えています。

今大会では、いくつかのサブテーマを設定して、それぞれのセッションを構成する予定です。また、特別講演は、「本郷バレーのスタートアップ・エコシステム」をサブテーマとした特別セッションの一環として実施する予定です。東大発のスタートアップ企業が群

生する「本郷バレー」に焦点を当て、同地域のスタートアップ・エコシステムを支えるアクターの方々にご登壇いただく予定です。さらには、組織学会国際委員会による国際セッションの実施も計画されています。

ただし、プログラムの内容は未だ流動的で、変更の可能性があります。プログラムの具体的な内容つきましても、開催日程と合わせて、随時お知らせいたします。

法政大学市ヶ谷キャンパスは都心に位置し、アクセスが非常に便利です。最寄り駅はJR・東京メトロ・都営地下鉄の飯田橋駅と市ヶ谷駅で、いずれも下車徒歩約10分です。当キャンパスでは、10年近くに及んだ建替え・改装工事が2021年に完了しました。新しくリニューアルされたキャンパスで皆様をお迎えできることを楽しみにしています。多くの会員の皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

2025年度組織学会年次大会 実行委員長 田路則子
事務局長 近能善範

【 2022 年度(第 19 期)決算報告 】

2023 年 10 月 28 日開催の組織学会会員総会において、2023 年度（第 19 期）の決算報告が承認されました。

第19期 特定非営利活動に係る事業会計			
活 動 計 算 書			
自 令和 4年 9月 1日 ～ 至 令和 5年 8月 31日			
特定非営利活動法人 組織学会 (単位：円)			
科 目	金 額		
I 経常収益			
1 受取会費			
個人会員 受取会費	23,672,000		
団体会員 受取会費	820,000	24,492,000	
2 事業収益			
定例研究会参加費	224,000		
年次大会参加費	1,465,000		
研究発表大会参加費	2,870,500	4,559,500	
3 その他収益			
雑収入	30,000		
受取利息	70	30,070	
経常収益 計			29,081,570
II 経常費用			
1 事業費			
(1) 人件費			
給料手当	2,673,835		
法定福利費	511,260		
人件費計	3,185,095		
(2) その他経費			
大会委員会費	4,705,435		
組織科学編集委員会費	9,263,202		
学会賞委員会費	79,791		
企画・定例会委員会費	575,308		
支部研究費	40,220		
総務委員会費	2,845,506		
広報委員会費	132,000		
国際委員会費	513,678		
その他経費計	18,155,140		
事業費 計		21,340,235	
2 管理費			
(1) 人件費			
給料手当	2,673,834		
法定福利費	511,260		
人件費計	3,185,094		
(2) その他経費			
振込手数料	23,397		
什器備品費	417,259		
ソフトウェア利用費	162,569		
支払家賃費	1,797,564		
会計顧問料	209,000		
その他経費計	2,609,789		
管理費 計		5,794,883	
経常費用 計			27,135,118
当期経常増減額			1,946,452
III 経常外収益			
経常外収益 計	627	627	627
IV 経常外費用			
経常外費用 計	0	0	0
当期正味財産増減額			1,947,079
前期繰越正味財産額			72,711,450
次期繰越正味財産額			74,658,529

【 2024 年度(第 20 期) 予算 】

2023 年 10 月 28 日開催の組織学会会員総会において、2024 年度（第 20 期）の予算が承認されました。

— 第20期 予算書 —

自 2023年9月 1日
至 2024年8月31日

(単位: 円)

科 目	予算額	備考
I 収入の部		
1 会員会費収入		
個人会員分	24,000,000	
団体会員分	820,000	
2 定例研究会参加費	400,000	
3 研究発表大会・年次大会参加費	3,500,000	
4 雑収入	100,000	
当期収入合計(A)	28,820,000	
期首収支差額(前期繰り越し金)	43,109,348	
収入合計(B)	71,929,348	
II 支出の部		
1 事業費	27,487,000	
大会委員会費	5,975,000	
組織科学編集委員会費	14,650,000	
学会賞委員会費(高宮賞)	450,000	
企画・定例委員会費	650,000	
支部研究費	240,000	
総務委員会費	3,472,000	
広報委員会	850,000	
国際委員会	1,200,000	
2 管理費	11,480,000	
給与手当	7,000,000	
臨時給与	30,000	
法定福利費	1,600,000	
振込手数料	40,000	
什器備品費	250,000	
ソフトウェア利用費	200,000	
支払家賃	1,850,000	
会計事務所顧問料	210,000	
法人登記手数料	300,000	
3 予備費	50,000	
当期支出合計(C)	39,017,000	
当期収支差額(A)-(C)	△ 10,197,000	
次期繰越収支差額(B)-(C)	32,912,348	

【 総 務 関 係 】

【 1 】 年会費納入のお願い

既にご案内のとおり、2023年9月1日より2024年度（第20期）に入っております。つきましては、お早めに年会費のご納入をお願いいたします。

1. 口座振替(自動引落)の方

2023年9月27日にご指定の口座から振替いたしました。何らかの理由で振替できなかった場合には、事務局よりご連絡を差し上げる予定です。

2. クレジットカード決済開始について

今年度分より、年会費のクレジットカード決済を開始いたしました。「会員管理情報システム (SMOOSY)」のマイページよりお支払い手続きかが可能となります。

その他、ゆうちょ銀行でのお支払いをご希望の方には、「払込取扱票」をお送りしておりますので、窓口にてお手続きください。

※一部会員には滞納や支払遅延がみられ、予算執行上の扱いや決算時の未払い処理等で運営上の問題が発生しております。会員の皆様には、くれぐれもお忘れなく会費をお支払いいただきますよう、よろしくお願いいたします。

【 2 】 会員管理情報システム (SMOOSY) 登録情報内容確認のお願い

当学会では、本年8月より、会員情報管理システム「SMOOSY」を導入いたしました。会員マイページより、ご自身の登録情報（所属・住所など）の閲覧・変更、会費納付状況の照会、会費支払方法の変更が可能になっております。

これまで紙媒体で発行していた会費の請求書・領収書についても、SMOOSYの会員マイページからPDFファイルをダウンロードしていただけます。

まだSMOOSYにログインされていない場合、この機会にご確認いただけますと幸いです。

会員マイページへのログイン方法は以下の通りです。

【会員マイページ ログイン方法】

- (1) 会員マイページの[初めてログインする方はこちら]をクリックし、会員情報として登録しているメールアドレス（ログイン ID）を入力して[送信]ボタンをクリックします。

会員マイページ：

<https://aaos.smoosy.atlas.jp/mypage/login>

- (2) 「パスワード設定 URL のお知らせ」メールが届いたら、メール文内のパスワード設定 URL をクリックします。
- (3) パスワードを入力して[登録]ボタンをクリックします。
- (4) [会員マイページ]ボタンをクリックすると会員マイページを表示します。
- (5) 画面一番下の[会員情報を変更する]ボタンをクリックし、ご自身の情報を確認・更新してください。

※操作方法が不明な場合は会員マイページ画面右上の[ヘルプ]をご参照ください。

※ログイン ID が分からない場合は、学会事務局までご連絡ください。

【2024 年度 若手学会員を対象とする研究支援について】

組織学会では、組織研究を活性化するために、若手学会員の英文論文の執筆・発表や共同研究等を奨励・促進する研究支援を、下記の通り実施します。

＝ 記 ＝

A) 英文論文の校正支援(1 件当たり 5 万円)

(1) 支援内容

- ① 組織科学英文年報や国際ジャーナルに英文論文を投稿する論文、国際コンファレンスや海外の学会で発表するフルペーパー(アブストラクトのみの場合は支援対象外)の英文校正費用を対象として、1 件当たり 5 万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 応募締切時において 40 歳未満の正会員が第一著者であることが必要です。
- ② 再応募も可能ですが、一度支援を受けた場合には、最低 2 年間は再応募できないものとします。

(3) 応募手続

- ① 応募者の連絡先や投稿先などを、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ② すでに投稿済みの場合には、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を添付してください。
- ③ 締切は年3回(12月・3月・6月)設けます。2024年度は、2023年12月1日(金)、2024年3月8日(金)、6月7日(金)を期日とします。
- ④ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。受付は締切日の17時までとします。

(4) 支援決定後の手続等

- ① 支援決定後に投稿する場合は、研究奨励費受領から1年以内に投稿することが望めます。投稿後は、受理レター(プリントアウト・コピー等でも可)を組織学会に提出してください。
- ② 学術ジャーナル・学会予稿集などに採択され、掲載が決定した場合には、掲載論文に組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

B) 若手会員を中心とする共同研究(1件当たり10万円)

(1) 支援内容

- ① 代表者およびメンバーの半数以上が、応募締切時点で40歳未満の正会員である共同研究を対象として、1件当たり10万円を研究奨励金として組織学会より補助します。

(2) 応募条件

- ① 共同研究のメンバー全員が正会員で、代表者およびメンバーの半数以上が応募締切時点で40歳未満であることが必要です。
- ② メンバーの所属先は、複数の機関であることが望めます。
- ③ 継続申請も可能ですが、原則として最長2年までとします。

(3) 応募手続

- ④ 参加メンバー氏名、研究テーマおよび内容等を、規定のフォーマット(組織学会ホームページに掲載)により申請してください。
- ⑤ 締切は年1回(3月)設けます。2024年度は、2024年3月15日(金)を期日とします。
- ⑥ 組織学会事務局宛に、必要書類を添付ファイルとして電子メールで送付してください。

(4) 支援決定後の手続等

- ⑦ 研究グループは自らの責任において活動し、研究奨励費受領から1年以内に研究成果報告書を、組織学会事務局宛に提出してください。研究成果報告書は、組織学会ホームページで公開します。
- ⑧ 研究成果については、研究発表大会・年次大会などで発表することが望まれます。他学会等で研究成果を発表する際には、組織学会からの補助を受けている旨を明示してください。論文などとして学術誌等に掲載が決定した場合には、組織学会より補助を受けている旨を明記し、抜き刷り(電子ファイルもしくはハードコピー3部)を組織学会事務局に提出してください。

組織学会通信 第94号

2023年12月20日

発行 特定非営利活動法人 組織学会
事務局

〒100-0005 東京都千代田区丸の内2-5-2
三菱ビル 地下1F 171区外

TEL : 03-5220-2896

FAX : 03-5220-2968

URL : <https://www.aaos.or.jp>